破れかぶれ

川口松太郎

破れかぶ

川口松太郎

毎日新聞社

破れかぶれ

価　五三〇円

昭和四十年十月二十日印刷
昭和四十年十月二十五日発行

著　者　川口松太郎
装幀者　岩田専太郎
発行者　赤木益一郎

発行所　毎日新聞社
東京都千代田区有楽町一の一一
大阪市北区堂島上二の三六
北九州市小倉区紺屋町七の二〇七
名古屋市中村区堀内町四の一

印刷　中央精版
製本　中央精版

≪検印廃止≫

© 川口松太郎 1965

破れかぶれ

サンデー毎日・連載

一九六四・四・五～一九六五・八・一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

破れかぶれ　目次

苦労という事　七
古本屋生活　四〇
人間の裏　六六
悲しき学校　一一
江戸橋ぐらし　一四三
祖母井村　一七一
転落無明　二一七

破れっぱなし　二六一
図太さ修業　三一二
父の死とその前後　三三六
深川悟道軒　三六一
人生放浪　四〇〇

題字　梅原竜三郎
装幀　岩田専太郎

苦労という事

一

戸籍を見ると私生児とはっきり書いてある。それを発見したのは小学校三年の時だった。

「こんな子は貰わなければよかった」

腹を立てた母親が、不用意に発した声も三年生の時に聞いた。

「俺は貰われて来たんだ」

そう思った時は悲しかった。

真実の親と思っていた両親が、養父母と知った淋しさも深かった。年は十歳だった。

「貰わなければこんな苦労はなかったのだ」

養母はそうもいった。

彼、芳太郎は、首を垂れて養母の罵る声を聞いた。

俺は継っ子なんだ。

継母が継っ子をいじめる話は五郎政宗の伝記で読んでいた。政宗も継っ子だったが、継母が彼をいじめたので、養父が怒って母を切ろうとした。政宗は養母の躰に抱きついて重って倒れ、切りつけた養父の太刀が政宗の肩を切った。いじめられた事を恨みに思わず、養われた恩を感じ、母をかばって自分が切られた。

孝子政宗の伝記を読んでいたので、真実の両親でない事にも失望はしなかった。

育ててくれた恩義には、酬いなくてはならないと思った。

政宗伝を読んでいなかったら、もっと深刻な印象を受けたかも知れないが、読んでいたお陰で、それほどは悲しまず、本当の親でもないのに、よく育ててくれたと、養い親に悪感情を持たずにすんだ。

然し、本当の親は何処にいて、どういう人なのか、知りたいとは思った。どんな父と母のもとに生れた人間か、知って置きたいと思ったが、知る機会はなかった。

育ててくれた親たちに、教えてくれともいえなかったし、養父母もいわなかった。

いわない限りは、しいて聞こうとも思わず誰が親であろうと自分は自分だ。そんな事にくよくよするのは意気地なしだ。今更本当の親に会ってどうするんだ。

そんな風にあきらめてしまった。

無事でいる間はそれですんだが、不幸な場面に向い合ったり、悲しい思いにぶつかると、疑いが出て、「本当の親ならこんな事はしないだろう。貰われて来た子供だから、こんな

思いをするのだろう」と僻んだ考えを持つ事もあった。
その最初は、小学校四年を修業した時だ。
「学校は四年で好い。四年まで行けばあとは働け。工面の好い家なら、高等へも中学へも行かれるが、貧乏人は出来ない。働きに出てくれ」
と、養父はいった。
父は左官の職人で、親方の下職で、僅かな手間賃で一家四人をささえる貧民だ。景気が悪くて、仕事がなくなると、土方の下職や、屋根屋の手伝いなぞに雇われ、辛うじて四人分の米を買って帰る生活だ。
板の間には何時も、ゆでた小松菜が水につけてあり、飯どきになると、水を絞って、醤油をかけたものがおかずだった。長雨が続いて、仕事に出られなくなると、菜っ葉も買えなくなり、米を炊いて醤油をまぜ、握り飯にして三度三度喰べた。
学校へは弁当を持って行かなかった。昼飯時間には駆け足で家へ帰って、冷えたむすびを喰べて、学校へ駆け戻った。
そんな生活も悲しいと思わなかった。彼の住んでいる近所は、同じような貧民が軒を並べ、彼の家だけが特別に貧しい訳でもない。近所が豊かだったら、僻みもしただろうし、曲った道へも走ったであろうが、今戸八幡の奥の六軒長屋は、みんな同じ貧乏世帯だった。
「醤油が切れてしまったんだけれど、あまってる家はないか」
井戸端から呼ぶお内儀さんたちの声を、彼は幾度も聞いた。
すると、醤油瓶をさげた長屋女房が、
「うちにあるよ」
「あたしんとこにもあるよ」
と、惜しげもなく持ち寄って、乏しいところへ融通してやる。持ち物を隠して知らん顔する者はいない。
一つの井戸を中心にして、六軒ずつの長屋が両側から向い合い、十二世帯の貧民が、その井戸水で生きている。醤油ばかりでなく、米でも塩でも砂糖でも相互扶助の共同躰を作っている。
病人があればみんなで看護し、お産があれば多勢で手伝い、死者があれば長屋中で供養する。
先達という行者がいて、お経まがいの拝みを上げ、寺へは行かずにやき場へ運ぶ。弟が生れて半年目に死んだ時もそうだった。
貧しさは、限界を通り越してしまうと悲しくなくなる。裕福な人が失敗して貧乏すれば悲しかろうが、生れた時からの貧民は、貧乏が当然で、生活の困窮を宿命と感じている。
喰う米がなくなってしまっても、
「誰か一升貸してくれ」
と、井戸端で呼べば、十二軒の長屋から、わやわやわやと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

貧民女房が集って来る。一軒一合ずつ十人が持って寄れば一升になる。その代り、金が入って米が買えれば、何を置いても借りた分から返しに行く。

貧しくとも人情は厚かった。

十二世帯の全部が喰えぬ時はなく、無言の共同躰は、お互いに助け合って、温かみのある貧困だった。

芳太郎が僻まずにすんだのも、この生活に馴れていたからだ。彼と同年前後の少年十人が同じ学校へ通っている。

一人だったら悲しいが、十人いると強くなり、彼はその中のリーダーだった。喧嘩があれば頭分になって押しかけて行き、弁当を持って行かれぬ仲間を引き連れ、学校から長屋まで駆け足で帰り、再び学校へ戻って行く。その中心も彼だ。

十人の中ではずば抜けて成績もよく、不成績の子があれば復習して補ってやり、八幡様の祭りになれば、先頭に立って御輿をかついで、町内を暴れまわる。貧乏を悲しまぬ芯の強さは、六軒長屋の貧乏時代に養われたのだ。

極貧の継っ子という、最下等の悪条件を悲しみもせずに育った彼が、最初の涙を感じたのは四年生を終えた時だ。

「学校は六年まであるんだから、もう二年やらしてくれよ」

と、交渉しても、養父は、

「お前は成績もいいのだし、やってやりたいのは山々だが、俺たちは喰う米がない。今の俺の稼ぎは学校どころか、喰う事で一杯だ。たのむから奉公に行ってくれ」

と、いった。

その一言に諦めて、学校をやめ、千束町のまけぬ堂という洋品屋へ小僧に行った。住み込みの丁稚奉公だ。奉公に行くのをいやとは思わないが、学校を四年でやめるのが悲しい。

友達に別れを告げた時には流石に、

「ほんとの親は何処にいるのだろう」

と、思った。本当の親なら、どんなに苦しくとも学校だけはやってくれるだろう。そう思うと涙が出た。

涙もほんの一瞬だった。

諦めの早いのも、貧民の特性で、まけぬ堂へ住み込んでしまうと、忽ち店に同化して、くよくよせずに働いた。店は浅草公園の瓢箪池のどんじりから、吉原土手へのびる町通りの、米久という牛肉店の前だった。店の表に、紅白だんだらの洋傘を、五ッ重ねてさげたのが看板で、メリヤスのシャツ、ズボン下、サルマタ、ワイシャツ、襟巻、帽子、ハンケチ、靴下等に、ステッキ、洋傘その他の洋品雑貨一切の小売り店で、洋品屋とも唐物屋ともいった。

明治四十二年の三月末で、桜の花のほころびる頃だった。

日曜になれば公園まで来て、一日中遊んでいたから此の近くの地理はよく知っている。まけぬ堂の横を入ると、公園裏の大ドブがあって、向い側が花屋敷の裏手で、ドブに沿って左へ曲ると、草津亭という料理屋の広い庭に、滝のかかっているのが外から見えた。草津の隣は共遊軒という玉突屋で、

紅白の玉突き遊びを、立ちどまって眺めるのも、日曜の日課だった。

何時も通る道のまけぬ堂へ奉公に来たのは、自分の繩張り内へ来たような気がしていやではなかった。店には小僧が五人と、番頭が二人いて、小僧たちは品物の出し入れと店の掃除と雑用で、よく売れる店だけに忙しかった。

まけぬ堂という名の通り、正札かけ値なしの商いだったから、お客は安心して買いに来て、馴染みの人が多かった。

「値引きをしないのだから、他所の店の売値をよく調べろ。それより高かったら信用が落ちる」

と、他店の値段を注意させ、値引きをしない頑固さが名物になってよく繁昌した。

お目見得の時には、

「小さな子だね」

と、お内儀さんは不服そうだった。

「陰日向をしてはいけない。主人の見ている前も、見ていない時も、同じように働かなければいけない」

と、老主人は教えた。然し主人のその教えが、少しも守られていない事も直ぐ判った。小僧たちも番頭も、主人のいる時と、いない時では、態度が変って残らずが陰日向をした。

食事は台所の板の間で箱膳で喰べる。小さい塗り箱の中に、箸と茶碗と椀が入っていて、蓋をひっくり返して箱の上へ乗せると膳になる。

朝は味噌汁と漬物、昼は野菜の煮物で、夜は肴が一切れつく。家にいて、菜っ葉ばかり喰べていた彼は、夜の肴の一切れを大変贅沢な気がした。三度の食事は家にいるよりも、豊かでたっぷりしていて、楽しみだった。

夜になると米久の牛鍋がぷんぷん匂う。店が向い合っているので、下足札を叩く下足番や、襷がけで働く女中の姿も見える。

「大きくなったら米久へ上って牛鍋を喰べよう」

そう思いながら、横目で店口を覗いて、食欲をそそる匂いをこらえた。

朝の早さは辛かったが、親たちの貧乏を見ているよりはましだった。

明るい顔で、よく働いて、主人にも番頭にも気に入られた。

小僧たちの一番いやがるのは便所掃除で、一同が交替で掃除をするのだが、彼はちっともいやがらず、みんなに替って毎日自分がやった。

それを女中が見つけて、主人に告げ口をして、小僧たちが呼び出されて叱られた。

「新参者に便所掃除を押しつけるとは何たる事だ」

と、主人は怒った。小僧たちは、芳太郎が告げ口をしたと思い、彼と口をきかなくなった。

古参の五人が同盟して、新参の彼を除け者にして憎んだ。

店にいても、食事の時にも言葉を交さず、夜も彼の布団だけは少し離された。
それを清という女中が気がついて、
「いじめられてるのね。可哀そうに、あたしがお内儀さんに告げ口をしたのが悪かった。でも辛抱しといで。何をされても我慢して黙っといで」
と、なぐさめて、彼のお膳には肴の切り身を大きくつけてくれた。辛いと思った事はなかったのに、清に慰められた時だけ涙がこぼれた。親にも優しくされなかったのに、嬉しさが身に浸みて、却って悲しかった。辛くとも泣かないのに、優しくされると涙が出るのも貧民の子の特性だ。五人の古参者がいじめにかかっても、驚かなかったが、清に慰められるとほろほろ泣いた。
清は、仕事を終ったあとの店の間へ来た。品物はほこりのかからぬように毎日片づけ、そのあとへ小僧たちが布団を敷いて寝る。
その夜も、彼の布団は離れて敷かれて、あとの五人がぴったりとくっつけてある。
そこへ清が入って来た。年は二十二、三歳か、銀杏返しの髪の毛のつやつやと黒い女だった。
「あんたたち、芳どんをいじめてるんだね。便所掃除で叱られたのを根に持って、口もきいてやらず、夜も一人だけ、布団を離して寝るなんて、こんな小さい子をいじめて卑怯だ」
と、血相を変えていい、
「奉公に来るくらいだから、金持の坊やは一人もいない筈だ。親に離れて苦労を覚悟して来ているのに、何だっていじめるんだ。便所掃除の告げ口をしたのは芳どんじゃない私だ。掃除を厭がらずにやったのも、古参のみんなから可愛がられようと思えばこそじゃないか。それを五人がぐるになっていじめるとは何だ」
と、叫んだ。
流石に五人がしんとなった。
芳太郎は、布団の上へ坐って、涙の浮いている目で清を見た。
「この人はどうしてこんなによくしてくれるんだろう」
そう思うと又涙が出た。なかなかとまらなかった。古参小僧にいじめられても泣かないのに、やさしくされるとすぐ泣いてしまう。彼にとって清は人生最初の恩人だった。
翌日から古参者の態度も改まって、五人とも口をきくようになった。
最古参の正どんは、
「馬鹿正直に働くからいけないんだよ。六人いるんだから、みんながうまく働いて、自分だけ目立っちゃいけないんだ」
と、いった。

自分一人目立ってはいけない。
なるほどと思った。集団生活の一つの真理だ。六人が同じ分量で働かないと平和が乱れる。一人だけ目立つという事は、残った五人が目立たない事になる。誰もみんな目立ちたいのに、必要以上に働くと統制が乱れ、適当に怠ける。
ほどほどにしていれば目立つ憂いはなく、目立たなければ古参者は安心する。六人の小僧も長屋生活と同じ共同躰で、全員歩調を合せれば穏やかだが、芳太郎にはそれが出来なかった。
小柄なので、小取り廻しがきいて足が早く、行動が敏捷で、きびきび動き、用事をいいつけられると誰よりも早い。
番頭に煙草を買って来いといわれる。
ごみが落ちているから掃けといいつけられる。
馬が糞をたれて行ったから片づけろと命令される。
千束町にも荷馬車が通り、馬が平気で糞をして、それを掃除するのも小僧たちの仕事だった。その掃除も順番が決っていて、
「今日は誰の番だっけな」
と、お互いが顔を見合せているうちに、彼が立ってしまう。
ほんとは立つことがいけないのだ。決められた順番通りにしなければ目立ってしまうのに、彼は待つことが出来なかった。
「掃いとけ」
と、いわれると、
「へい」
と、気軽に立ってしまう。立ってから「しまった」と思うのだが、もう遅い。五人の目がぎろりと睨む。
然しもう仕方がない。睨まれているのを背中に感じながら馬糞を掃いてしまう。主人の目にも、番頭の目にも、
「よく動く小僧」
と、見えるのは目立つ証拠だ。
主人夫婦も気に入って、
「いい子を探し当てた。あれは掘出しものだった」
と、喜んでくれた。
掘出しものの意味は、どうせ長く続かないと思われていたからだ。
職人の子が奉公しても長続きせず、商人の子でなければいけないと思われ、貧乏な左官屋の伜というだけで、初めは乗り気でなかった。それが意外によく働き、案外の掘出しものだったという意味だ。
清が怒鳴ってからは、彼を除けものにする不当処置はなくなったが、然し、身軽に動いて、主人番頭に気受けのよいことは、不快がられた。
沈黙反抗はなくなったが、態度は冷たく、誰も仲よくしてくれなかった。仕事がすんで布団を並べて寝る時にも、彼だけは話の中へ入れない。

年の相違もあった。彼は十二だが、あとの五人は十六から十八までで、年の離れているのも損だった。大戸をおろして、店を片づけて、布団を並べて寝る時が小僧の天国で、最古参の正どんと徳どんは、電気を消してから、そっとそばを食いに行ったりする。

食欲の盛んな年頃だから、それぞれ買い食いは盛んだが、彼にはそれが出来なかった。買い食いどころか、一銭の小遣いも持っていない。

どの小僧も親たちから小遣いを送って貰うらしく、豆餅や大福を買って食べたが、彼には出来なかった。

「一つやろう」

と、正どんが豆餅をくれそうにしたが彼は断った。

「うちが貧乏で、小遣いが貰えないから、お返しが出来ない」

そういえばよかったのだが、いえなかった。

欲しくないと断ったのがいけなかった。小僧たちのやったり貰ったりしているのを見ているから、貰うだけでお返しが出来なくては淋しい気がして断ったのだが、正どんはそう思わず、

「あいつ豆餅を突っ返しやがった」

と、逆にひねくれて怒った。

漸く馴れて来た二月日の五月末に、主人から呼ばれて

「お前はあと二年学校へ行かなければ、奉公は出来ない事になっている。義務教育を終らせるように、校長さんから手紙が来た。これを持って家へ帰んなさい」

と、校長の手紙を渡された。

彼は帰りたくなかった。井戸を取り巻く貧民長屋へ帰るのはいやだった。

「どうしても帰らなければいけないでしょうか」

「こればかりはどうしようもない。卒業してからもう一度来なさい」

と、いってくれた。

そういわれたのに力を得て、荷物をまとめて、みんなに別れの挨拶をした。

女中の清は、別れの昼飯に、はんぺんの味噌汁を作ってくれて、

「このはんぺんは私の小遣いで買ったんだよ。私の田舎では、お祝い事があると、はんぺんの白味噌汁を食べる。白味噌はないけれどはんぺんだけ買ってあげたよ」

と、白いはんぺんのどっさり浮いている味噌汁を喰べさせてくれた。彼は泣きながらそれを喰べた。

小風呂敷を下げて裏口を出ると清が一人見送ってくれた。

「卒業したらきっとおいで。待ってるよ。勉強して優等取っといで」

と、手を握っていった。

昼間なので、泣き出すと恥ずかしいから、うしろを見ずに駆け出した。
大ドブの前まで行って振り返ると、清はまだ立っていて、手を振ってくれた。

二

●六軒長屋の親の家へ帰って行くと、父も母も困ったように、
「学校は四年で好い筈なのに、何だって六年行かなければならないのだ」
と、いった。義務教育が二年延長されたのは、その年からであった。
「あと二年、喰わす事が出来るだろうか」
と、父はいう。憎んでいうのではなく、貧苦に困り果ててうぶやく声だ。
彼は再び学校へ行った。退学してから二月目だった。
「今まで何をしていたんだ」
と、みんなはいった。その声に、嘲りを感じ、何も答えなかった。
看の切り身も、煮肴もなく、ゆでた菜っ葉に醤油をかけるおかずに戻った。然し悲しみはしなかった。
あと二年辛抱すれば好い。卒業すればまけぬ堂へ行かれる。清さんのこしらえてくれるはんべんのおつけがもう一度食べられる。
「優等を取って、優等証書を清さんに見せるんだ」
と、くじけずに励んで、勉強した。
清さんは彼の心の支えになった。清さんを心に置いて、人をたよらなかった。学校の友達も、暮しに不自由のない者が多く、淋しさを恐れて交き合わなかった。
前山と塚田だけが仲よくした。家が近くで、一家の貧困を知っていたからだ。
前山は警察署長の義弟で、塚田は今戸焼屋の息子だった。今戸焼は土地の名物で、植木鉢や神仏に供える素焼の陶器を造っている。
素焼の人形に彩色し、小銭を入れる穴を開けた福助の貯金箱は、どの店にも並んでいた。塚田は其処の一人息子で、級中の模範生だった。
前山は、女のように美しい美少年で、成績も優秀で、二ヵ月間のブランクを埋める算術や国語や、地理歴史を教えてくれたのは、この二人だ。
優等で卒業するのが目標だったから、夜遅くまで復習して、遅れを取り返そうと努力したが、家の貧しさはどうにもならなかった。
親たちの衣類は質屋へ行き、金になりそうな品物を、金に替えて食べている生活だ。景気が悪くて仕事がなく、職人の転業する者も多く、溜息をついて話し合う親たちの声を聞き

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com